

信仰の完成を自指して

(黙示録3・20)

一、改めて指針聖句に聞く

改めて今年の指針聖句を開き、主の語りかけに耳を傾けたいと思います。

黙示録3章20節です。見よ、わたしは戸の外に立つてたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入つて彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」とあります。ですが、この日本語訳ですと、イエスさまがラオディキアの教会から閉め出されているユアンスを受けますが、そうではないということをお語りしました。元のテキストには、「わたしは戸の外に立つてたたいている」とは書かれていますんで、「わたしは戸に向かつて叩いている」と書かれています。ですから、ラオディキアの教会がイエスさまを締め出していたわけではありません。キリストが「わたしはすぐに来る」と繰り返し語られた(3・11、22・7、22・12、22・20)文脈において、語られたことばかりです。「わたしはすぐに来る」は、キリストの再臨のことです。キリストが、ラオディキアの教会という、自分たちの生活に満足し、何が大切であるかを見失いかけていた教会を訪ねられ、ラオ

ディキアの教会の外で、戸に向かつて叩いているというイメージです。私はその、主のお姿を想像しますに、ありがとうございました。その前の19節に、「こうあります。〈わたしは愛する者をみな、叱つたり懲らしめたりする。だから熱心になつて悔い改めなさい。〉」と。創造主なる神は、イエス・キリストによつてこ自身を現されました。そうしますと、「神は私たちを見捨てられない」が御意思であると知らされます。私たちがなすべきことは、神の前に「悔い改める」こと、ないしは「立ち返る」ことです。私たちが知つておくべきは、主の御意思です。それは、たとえ現在が、主の御意思から外れている生活になつてしまつたとしても、神は私たちを受け入れようとしていることです。テサロニケ人への手紙第一5章9節がはつきりと語っています。〈神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るよう定めてくださつたからです。〉と。今までに見てきたことですが、熱心な教会員ほど、人をさばく誘惑に駆られます。「あの人は教会に来ているけれども、心が伴つていないので、天国に行けないと思う」とかです。私たちの教会にそういう現象が起きないことを願う者ですが、もし起きてしまつたら、兄弟たちもしだれかが何かの過ちに陥つていることが分かつたなら、御靈の人で

あるあなたがたは、柔軟な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないよう気をつけなさい」という、ガラテヤ書6章1節の聖句を思い起こすのが良いと思います。

二、信仰の完成を自指して

「信仰の完成を自指す」は、私共の願いであり、大きく掲げるビジョンかと思ひます。「ビジョン」と聞いて、「もっと具体的なものが良い」と思う方も多いことでしょう。「今年の目標は受洗者30名とか、「やがて千名の教会になる」とかを定めて、牧師と教会員が燃えるとかを定めて、牧師と教会員が燃える教会もあることでしょう。ちなみに私は、何が正しい回答であるのか、正直に言つて、よく分かりません。ですが教会が、あるいは自分が最低の状態になつても、主を信じて望みを持つて歩んで行く姿勢がないと、浮き草のようになつてしまつと思ひます。

私は、日本国は、世界のどの文化にも属さない独特な文化を持つ国かと思つています。そういう意味では、表面は正反対に見えますが、イスラエルと似てゐます。この国に生まれ、この国で信仰に導かれたのは神さまによると思います。この国に生きる者は、神さまが私共と一緒に食事をしてくださるのは、最高の名誉です。私共は自分を着飾る必要はなく、ありのままで良いのです。そうしますと「イエスさま、私はもっとあなたにお仕えしたいのです」と信じる者です。イエスさまはラオディキアの教会に、そして私たちの教会に語つておられます。だれでも、わた

しはその人のところに入つて彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」と。

三、主は食事をともにされる

二度、聖句を見まいります。3章20節の2文目の「だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入つて彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」ここで語られている「だれでも」、「その人のところに入つて」、「彼とともに」、「彼もわたしとともに食事をする」は、いずれも单数形です。もつとも、七つの教会に宛てられた手紙のことばは、すべて、「あなたがた」ではなく、单数の「あなた」として語られています。教会は主イエス・キリストを信じる共同体ですが、大切なのは、「私」という個々人が主イエス・キリストを信じていることです。また食事をするとは、聖書の舞台となつた地域では、食事は「互いの親密さ」を確認し、場合によつては「和解する」という意味がありました。イエスさまが私共と一緒に食事をしてくださるのは、最高の名誉です。私共は自分を着飾る必要はなく、ありのままで良いのです。そうしますと「イエスさま、私はもっとあなたにお仕えしたいのです」という意思に導かれます。これを続けているなら信仰は全うされ、完成に近づいて行きます。